

「エコ・バイオ・グリーン・低炭素化」という言葉にひそむ矛盾

政治、経済、ビジネス、日常生活、世界中どこにいても、エコ・バイオ・グリーン・低炭素化という言葉をつけなと事が始まらない昨今であるが、地球を思いやる響きのあるこれらの言葉が使われて入る現実の舞台裏を見ると、驚くほどの矛盾がある。

これからの資源のあり方を研究しているドイツのウパタール研究所 (Wuppertal-Institute) *の創設者、Prof. Friedrich Schmidt-Bleek (フリードリッヒ・シュミット-ブレイク教授 下写真) の新著書：Grüne Lügen (直訳すると「グリーンの嘘」) を読むと、今、私たちの直面している資源環境祖費で経済社会問題が、いかに複雑怪奇に絡み合った状況にあるのか、その解決方策の難しさを手に取るように認識できる。そして、なによりも、私たちの環境資源保護への表面的でしかない理解、あるいは、誤解、軽率な態度を反省させられる。



*:同研究所は、OECD 経済協力開発機構(Organisation for Economic Co-operation and Development)、国際応用システム分析研究所(International Institute for Applied Systems Analysis IIASA)、世界資源フォーラムダヴォース(World Resources Forum Davos)、また、ファクター10 研究所(Factor-10-Institute)の各組織、研究機関とリンク。

同著は、最終消費財を作るのに、現在どれだけの資源(重量および容量)が使われているかを調査分析。有機・無機素材資源、水、空気、輸送距離、それに費やされるエネルギーについて、生産地にも注目しながら、データを集計分析している。



まず、象徴的な一文：「マリアは、朝起きると、12,5kg のプレスレットを腕にまとい、35kg のジーンズをはき、52kg のコーヒーマーカーで、カップに 1.5kg のコーヒを入れて目覚まし用に飲む。そして、3.5kg のジョギングジャケットを着て、400kg の自転車をこいで、オフィスに出勤。そこで、12 トンのコンピュータの前に座り、スイッチ・オン。70kg のスマートフォンを手に、あちらこちらと会話する。」

はて？さて！これを読んだ方は、いったい何を言っているか、戸惑われると思うが、ここに出てくる数値は、各最終消費財をつくるのに使われた総無機・有機素材、水、空気、輸送エネルギーの重量である。詳細換算パラメータは、ここでは省略するが、例えば、薄手の木綿生地 100cmx150cm には、綿の種子から栽培、生産、流通販売まで考慮すると、10,118 リットルの水が、使われている。標準液晶テレビ・スクリーンには、無機素材 2614kg、そして、なんと 78,928 リットルの水が使われている。とてつもない重量の素材、そして、水が消費されているのである。チャーミングで華奢な女性では、これだけの重量に耐え切れない。この現代人を代表するマリアは、筋肉もりの怪女ということになる！

思わずふきだしてしまうが、深刻な事態である。重量に換算してこれだけの資源を無意識に私たちは毎日消費しているのである。

私たちは、あまりにも、地球温暖化危機にともなう「低炭素化」という言葉にとられすぎ、様々な希少資源、何よりも水の浪費、その重要性に無頓着である。

新車展示会場に行くと、毎年厳しくなる排気ガス基準クリアーのために苦戦するカーメーカ各社が競うように改善した CO₂ 排出量を記載しているが、このデータのとり方も、最近では、疑問視されてきている。Dr. Norbert Ligterink (ノーベルト・リグテリンク氏)



左からドイツの小型・中型・大型クラス別、カーメーカにより表示されたCO₂排気量と実際に販売後に測定しなおした値との偏差。2010年あたりを境に、偏差が非常に大きくなっている。

によると、データを収集するテストゲレンデのコンディションによって、かなり排気量に誤差がでる。例えば、バルセロナの西、約 50Km にある Dorf Santa Oliva という試験場での燃費データは、特に摩擦の少ないアスファルトの路面走行環境のゆえに、非常に良い結果が出ている。さらに、これに加えて特殊タイヤを使用するので、実際販売後に走る通常の路上での CO₂ 排気量と比較すると、同氏によると、38%以上も偏差が出てくる。(上図)

また、現在の環境保護志向の税制、助成政策についても、よく見ると、まったく逆効果。コンツェルンにとっては、有利でも、

促進されるべき新しい技術セクターには、まったく寄与せず、ベンチャー企業が独り立ちできにくい税制状況である。欧州でダンピングする中国製太陽光パネルに、短期間のうちにドイツ連邦の太陽光促進のための助成金が吸い込まれてしまった例は、周知の事実である。

生の資源を直接使う 1 つの点としてのある産業セクターに税を課すのではなく、その資源が生産から消費までどのような動きをするのかシミュレーションし、分析熟慮、効果ある税制改革が必須である。各新技術の展開詳細をしっかりと認識したきめの細かい行政指導が望まれる。難しくとも、技術・営業・官僚間の柔軟なコミュニケーションは、欠かせない。課税・補助金は、結局は、端末にいる消費者市民たちの負担となるがゆえに、真に資源環境保護効果の出る税制改革が、一刻

も早く実施されなければならない。

そして、規則・基準を作る際には、必ずといってよいほど、規則から逃れようとする反発反動がでてくるので、新規規則の波及効果詳細をも、しっかりと把握する心構えが重要である。

それにしても、ダイナミックといえはそれまでかもしれないが、現在まだ増え続ける人間の消費力には、我ながら驚いてしまう。その一方で、私たちの日常会話は、減少しているように思う。消費するには、供給者のところに行って、売ってもらう交渉会話があるはずだが、今は、それすら、スマー

トフォンのキーパッドでオーダー。発注から発送まで、無口でいることも可能である。

地下鉄やバスに乗ると、乗客たちは、空いている席を競い合うように探し、座ると顔をまっすぐに構えずに、目を下にうつむいて、スマートフォンに熱中している。耳には、イヤフォンが詰まっているから、車内アナウンスが聞こえず、下車する駅を乗り過ごす人をよく見かける。

エコ・ビオ・グリーン・低炭素化という言葉だけが先走り、人々が、口から様々な思いをこめた言葉を発しなくなってきている毎日が、とてもさびしく思われる。

2世代ほど前までは、自分たちの住んでいる周りで採れる野菜、果物、花が各家庭にあった。穴が開いた靴下は、夜、家族団欒のもと、祖母たちが手で直し、アイロンかけを省くために、ハンカチは、入浴の際に洗い、壁タイルに貼り付け、スカートのひだや、ズボンの線を整え、布団の下に敷いて寝ていた覚えが、かすかにある。そんな慎ましさが、懐かしく感じられるのは、筆者だけであろうか？

(08.10.2014 小澤エネルギー研究所
Setsuko Schwarzer)

(参考資料)

Grüne Lügen: Nichts für die Umwelt, alles fürs Geschäft -
wie Politik und Wirtschaft die Welt zugrunde richten

Der Spiegel Nr.40 Seite 79

Photo of Pro. Friedrich Schmidt-Bleek:
<http://wupperinst.org/info/details/wi/a/s/ad/1784/>

Photo of Book "Grüne Lügen" by S. Schwarzer